

ロバート・バートン  
『憂鬱の解剖』  
第1部 第2章 第3節 第15項

岡村 眞紀子  
川島 伸博 訳

第15項

学への愛、すなわち学問のしすぎ。

学者の惨状と詩神<sup>ムーサ</sup>が憂鬱である理由についての脱線。

レオンハルト・フックス（『医学綱領』3. 1. 1）とフェリクス・プラタ（3巻「心の疎外」）とエルコレ・サッソーニア（『憂鬱症論』3章）は、学問のしすぎから生じる狂躁を別立てして論じる。フェルネルはその著書の第1巻18章で、狂気の要因として特に、学問、観想、習慣的瞑想をあげ、第86診察でも同じ言葉を繰り返す。ジョヴァンニ・アルコラーニ（『アル・ラージ註解』9. 16）は、猛烈な学究を他の要因と並び立て、リーヴェン・レメンズ（『自然の隠された神秘』1. 16）も同様に扱い、「学問を続け、徹夜することでこの病気になる人は多く、なかでも学者がもっとも罹りやすい」と言う。さらにアル・ラージ（1. 9）は、学者に加えて「総じて知力のすぐれた人」も罹りやすいと言う。マルシリオ・フィチーノ（『学者の健康維持』1. 7）は、学者を悩ます五大疫病のひとつに憂鬱症をあげている。憂鬱症はすべての学者をしばしばひどい目に合わせる大木槌であり、ある意味、常に付きまとう仲間とも言える。「悲し気で難しい顔をした哲学者たち」とウァロが言ったのは、おそらくこのためであり、「難しい顔」、「悲しい」、「無味乾燥」、「苦々しい」は学者を描写するのに共通して用いられる形容辞である。君主がすぐれた学者になることについて、パトリッツィがその君主論で嫌っているのはそのためである。というのも、マキャベリが主張するように、学問は君主の身体を弱らせ、その精神を鈍らせ、強さと勇気とを減じてしまう。また、すぐれた学者がすぐれた軍人であったためしなどない。ゴート族には、このことに気づいていた武人がいたようで、彼らがギリシアに攻め入ったとき、書物をすべて焼き払おうとしたのだが、この男は大声で反対し、断固として本を焼くべきではないと主張、「本という疫病をやつらに残しておくんだ。時がたてば本はやつらの活力と士気とをすべて消耗してしまうだろう」と言ったという。トルコ人たちが、皇帝の長子コルヌトゥスから王位継承権を剥奪したのは、この皇子が本を読み過ぎていたためだ。つまり、学は精神を鈍らせ、弱め、それゆえ

憂鬱症を惹き起こすというのは、世界中に共通する考え方である。

学者が他の人たちよりもこの病気に罹りやすい理由は、主に二つある。一つは、学者が座ってばかりで、孤独な生活を送る点にある。付き合うと言えば詩神と己のみ。つまり、身体を動かすことなく、また他の人たちと違って遊ぶことのない生活である。こういう生活をしていると満たされず怠惰になることがよくある。すると、多くの場合、この病の渦にすぐさま飲み込まれてしまう。しかし、一般的な原因は学問のしすぎであり、フェストゥスがパウロに語ったように、勉強しすぎると狂ってしまう。怠惰と同様、勤勉も度が過ぎると憂鬱症になってしまうのだ。トリンカヴェッラも同様の見解で、第1巻の症例12と13において、猛烈な学究ゆえにこの病気に罹った若い男爵ともう一人の男爵の二つの例をあげる。フォレスト（『診察』1. 10. 13）はルーアンの若い聖職者を診察して、この男は狂っていたが、「聖書を全部暗記していた」と述べている。マルシリオ・フィチーノは『学者の健康維持』第1巻の1、3、4章、第2巻の16章で「学者が他の人たちよりも毫釐しやすい」多くの理由をあげているが、まずは彼らの怠慢である。「学者以外の人たちは自分たちの道具の手入れを怠らない。画家なら絵筆を洗うし、鍛冶屋は金槌、金床、炉を気にかけ、農夫は鋤を手入れし、手斧が鈍らになれば研ぐ。鷹匠や猟師は鷹、猟犬、馬などを特に大切に世話し、音楽家はリュートなどの楽器の絃を張りかえる。ただ学者だけが、自分の道具、つまり脳と精神とを蔑ろにする。学者はこの道具を日々使い、そのおかげで世界中に名を轟かせるのであるが、学問をしすぎると脳と精神は尽きてしまう」。ルキアノス曰く、「綱はあまり強く引いてしまうと、切れてしまうことがあるので気をつけよ」。フィチーノは前述の書4章で、学問を司る土星と水星サトゥルヌス、メルクリウスがともに乾燥した惑星であるから、と別の原因を挙げる。ちなみにトストはこれと同じ原因から、水星のもとに生まれた人たちがひどく貧乏で、多くは乞食であることを説明する。というのも、彼らを支配するメルクリウス自身、たいした財産をもっていないのであり、かつて運命の女神たちがメルクリウスに罰として貧困を与えたからだ。それ以来、詩と貧困とは双子となり、分かちがたい存在となっている。

今日にいたるまで、学者はすべからず貧しく、  
金はみな学者から逃げ、粗野な連中のもとへまっしぐら。

メルクリウスは学者に知識を授けてくれても、金を与えてはくれない。二つ目の理由は瞑想で、「脳を乾燥させ、生来の熱を消し去ってしまう。というのも瞑想のために精気が頭に上っていくと、胃や肝臓から精気が欠乏するので、調合がうまくいかず黒血液と粗雑なものが生じ、また運動不足のために、余分な煙霧が体外へ発散されないからだ」云々。これら二つの理由は、ゴメス(4. 1「塩について」とナイマン（『想像力論』）とヨハン・フォクス（2. 5「疫病論」）も指摘しているが、彼らはさらに付け加えて、痛風、カタル、鼻カタル、体液不良、消化緩徐、視力低下、結石、疝痛、消化不良、便秘、眩暈、鼓腸、痙攣、衰弱など座りすぎから生じるあらゆる病気に、勤勉な

学者はきまって悩まされる、とも言う。学者はたいい瘦せ身で、乾燥し、血色が悪く、財産を使い尽くし、正気を失い、命を失うことも多いのだが、これはすべて度を越えた努力、学問のしすぎから生じる結果である。こういったことが信じられないというのであれば、偉大なるトスタードとトマス・アクィナスの作品を繙いてみるがよい。どのページにも努力の跡が見て取れるはずだ。アウグスティヌスやヒエロニムスなど幾千もの学者の本に目を通してみるがよい。

この道で、念願の目的に達したいと欲する者は、少年のときより、  
あくせく働き、うだる暑さにも、凍える寒さにも耐えてきた。

そしてそのために一所懸命働く。セネカがまさにそうだった。彼自身の告白によると(書簡8)、「私は一日たりとも怠惰に過ごすことはない。夜になって起きているのに疲れ、何度も何度も眠ろうとする目を無理に開けていることもしばしばだ」。『詩人アルキアス弁護』のキケロに耳を傾けてみよ。「他の人たちがふらついて、快樂をむさぼっている間、彼はずっと本を読んでいた」のであり、学者になる人はみなこれと同じ生活、しかも、声を大にして言いたいのだが、こういった生活を健康と財産と正気と命を危険にさらしてまでやっているのだ。アリストテレスとプトレマイオスは学問のためにいくら費やしただろうか。国王の身代金ほどだったとされている。アリストテレスは『動物誌』を、プトレマイオスは『アルマゲスト』を完成させるために、毎年巨額の金を費したという。サービト・イブン・クッラは第八天の動きを見出すのにどれだけの時間を費やしただろうか。四十年、いやそれ以上だと言われている。どれだけ多くの貧乏学者が正気を失い、あるいは痴れ者となりはてたことか。あらゆる世事、自身の健康、富、生活も幸福も顧みず、知識を求めてみても、その努力の挙句、俗世の目から見れば、滑稽にみえ、愚か者、うすのろ、馬鹿の烙印を押され、しばしば、毫碌して狂ったと拒絶され、軽蔑され、嘲笑われるだけ。例を知りたければヒルデスハイム(「狂気と熱狂について」)にあたってみたまえ。トリンカヴェツラ(3巻、診察36と17等)、ダ・モンテ(診察233)、ヨハン・ガルツェ(「生誕星座」33)、メルクリアーレ(診察86と25)、プロスペロ・カラーニ(『黒胆汁注解』)を読みたまえ。あるいはベドラムに行って尋ねてみるがよい。また学者は正気を保っていたとしても、その振舞から、愚者とか馬鹿のレッテルをはられる。「七年の学究生活の後」、

——彫像よろしく話さなくなり、  
人々から大いに蔑まれ、身を振って笑われる。

学者は、どんな馬鹿にだってできる乗馬さえできず、女性に挨拶して求愛したり、食事の席で料理の切り分けをしたり、へつらったり、暇乞いの挨拶もできないので——こんなことは、どんなにがさつ者でもできるのに——人々から笑われて軽蔑され、伊達男たちからは馬鹿だと思われる。そう、多くの場合、これが学者の辿る悲惨な運命であり、それも自業自得なのである。まったく

の学者、これすなわち、まったくの馬鹿なのだ。

頭を垂れ、大地をじっとみつめ、  
 ぶつぶつと独りごつ姿は狂える沈黙、  
 唇を突出し、言葉を吟味しているかのよう、  
 そして瞑想するのは病める老人の夢、無からは  
 何も生ぜず、何ものも無に転ずることはできぬ、と。

このように、学者はよく独りきりで瞑想し、座っているのだが、彼らのとる行動としぐさと言えまさにこれだ。フレゴーズ (8. 7.) の述べるところによると、トマス・アクィナスはフランスのルイ国王と食事中、突然、テーブルにこぶしを叩き付け、「マニ教徒の間違いを証明できたぞ！」と叫んだというが、アクィナスは、所謂、物思いに耽りがちで、彼の頭はいつもいろいろなことを考えるので一杯だったのだ。アクィナスは自分の失態に気がつく、大層、顔を赤らめたという。ウィトルウィウスが伝えるアルキメデスの話もこれに似ている。ヒエロン2世の「純金」の王冠に銀がどれだけ混じっているかを測る方法を見つけると、彼は風呂から裸のまま駆け出し、「我発見せり！」と叫んだというし、「自分の研究に熱中するあまり、周りで起きていることに気づかないこともしばしばあった。シラクサの街が占拠され、兵士たちが彼の家を略奪しようとしていたまさにその瞬間も、彼は気づかなかった」。聖ベルナルは一日中レマン湖の畔を馬で駆けた末、今、どこにいるのかと尋ねた (マルリッチ 2. 4)。アブデーラの住民たちは、デモクリトスの振舞を見ただけで狂っていると思い、治療してもらうためにヒポクラテスを呼びにやった。またデモクリトスが真面目な席にでると、どんなときでも笑われた。テオプラストスの伝えるところによると、ヘラクレイトスも同様、ひっきりなしに泣いていたという。またディオゲネス・ラエルティオスによると、ランプサクスのメネデーモスは狂人のように街を駆けながら、「我は地獄より密偵として派遣されし者、人々の行いを悪魔に告げるのだと叫んだ」という。これらの例と同じく、当世の偉大な学者とされる人たちも、たいていは、愚かで、外見や振舞という点ではだらしなく、滑稽で馬鹿げてみえ、まったくの世間知らず。彼らは天体を測定することができ、世界的に名を知られ、人に知識を授けることができても、交渉や契約のことになると、そこらの卑しい商人にさえ騙されてしまう。こういった学者たちが馬鹿者でないとしたら、何であらうか。「学外で広く行われていることに関しては、見たこともなければ、聞いたこともないのだから、学内にいる数多くの者は痴れ者同様」とはペトロニウスの至言。そもそも学者には経験をつむ方法も、手段もないのだ。ときの皇帝秘書官ガスパール・シュリックに宛てた書簡で教皇ピウス2世が言うには、「すぐれて学識ある学者を、私はたくさん知っていましたが、彼らは一人残らず粗野で愚かしく、礼節を一切わきまえず、暮らしのこと、政治のことになるとてんでだめでした。農夫から『雌豚は十一匹の子供を産むのに対し、驢馬は一匹しか子供を産まない』と聞かされたパグラレンシスは、驚愕して、騙されたに違いないと思ったといえます」。この学

者という職業について最も良く言っているのは、イサイオスについて小プリニウスが述べる言葉で、それ以外思いつかない。「彼は学者だが、他のいかなる職種の人よりも単純で」、真摯。たいいていの場合、学者は無害で、正直で、実直、無垢で率直なのである。

このように学者は毫碌や狂気や白痴などに陥る危険と災いにしばしば晒されているわけで、それゆえにヨハン・フォクスはかくの如く主張する。すぐれた学者は高収入を与えられ、他の人たちよりも格段に敬意を表され、「誰よりも高い特権を与えられるべきだ。学者は公共の利益のために自らを危険に晒し、その寿命を縮めているのだから」と。しかしながら、今日、学問のパトロンたちは、学芸の女神である詩神たちを敬わず、高貴で寛大な君主であれば与えるような当然の名誉と報酬を学者に与えることがないので、学者たちは大学で、学費や生活費などの出費もかさみ、うんざりする時間を過ごし、骨の折れる仕事をこなし、疲れる日々を送り、先に述べたような危険や災難に晒されながら、大変な苦勞をした挙句（その間、他の人たちが享受するような楽しみからは締め出され、生きている間ずっと籠の中の鷹のように閉じ込められるのだが）、この苦難を無事乗り切ることができたとしても、拒絶され、軽蔑されることとなり、そうなる悲慘の極みで、生活は困窮し、欠乏、貧困、物乞いの結末が待っている。彼らの辿る運命に付き従うのは、

蒼白の病、悲痛、心配、苦痛、  
恐怖、悪へと誘う飢え、恥ずべき貧困、  
見るもおぞましき怪物——

この他に何も悩ますものがないとしても、これだけで十分、学者たちはみな憂鬱症になってしまう。他の職種や職業ならば、たいいてい七年間の徒弟時代を過ごせば、技が身につき、それで食べていくことができる。商人は沖に出ている船荷の商品に投資し、もちろん海難事故の危険は高いのだけれども、それでも四隻のうち一隻でも船が戻ってくれば、たいいてい元はとれてお釣りがでる。農夫の収穫はほぼ確実で、彼自身大農家だったので割り引く必要はあるが、カトー曰く、「ユピテルでさえ損なうことはできない」。思うに、学者だけが、非常に不確実で、敬意の対象となることなく、惨事と危険に晒されているのだ。というのも、第一に学者になれる人の数が極めて少ない——有能で従順な人などいない——「木をどんなに集めてもメルクリウスにはならない」。軍人や将官ならば毎年輩出できるが、学者だとそうはいかない。皇帝ジギスムントが認めたように、国王は騎士や男爵の称号を与えることができる。これと同様に大学も学位を与えることはできる。「人は、誰でも何にでもなれる」。しかし、学識を与え、哲学者、芸術家、雄弁家、詩人を作り出せる人などいない。セネカが指摘するように、「おお、善き人よ、富める人よ」と言って金持ちや善人、幸せな人、適切な人を指すのは簡単だが、「学識ある人という称号を得る



ためには、莫大な時間を費やし、贅沢な服や髪型、馥郁たる香水を買えるだけのお金がかかる」のであり、学識ある人を見出すのは容易なことではない。学識はそんなに簡単に得られるものではないのだ。刻苦することを厭わず、そのために十分に知識を詰め込み、パトロンや親のふんだんな支援があったとしても、包括的な学識を得ることができる人などほとんどいない。また、流されやすい人の場合、人間の意志は必ずしも理性に沿うわけではなく、努力しなければならないことはわかっている、精励するのは難しい。悪友に誘惑されたり、「乙女に恋したり、酒に溺れたり」して、友人の災難や、自身の破滅の種に時間を費やしてしまう。はたまた、熱心かつ勤勉で、理知的で、能力のすぐれた人であったとしても、身体と心を、数え切れないほどの病気が襲う。この世に学究ほど辛い労働はないのだ。気質的に耐えられないにも拘らず、秀でてすべてを知ろうと努力するものだから、健康と富と正気、そして命すら失ってしまうこともある。鋼の身体で幸運にもこういった災難を避けることができたとしても、年齢も熟年の域にあってようやく、学究の成果を得て、認められるところまで至る。しかし、これだけ多くを費やしてからは、昇任を享受する時間は残らず、その栄光からの遠さという意味では、大学に初めてやってきた二十年前のあの日と変わらないのである。というのも、これだけ有能になってしまっても、彼らには進むべき道がない。彼らの多くが辿ることになるお決まりの運命は、学校の教師か講師か司祭助手になるかで、お給金は鷹匠なみで年10ポンド、雇い主や教区に気に入られたら、それに食事とちょっとした給付金加わる程度である。しかし、彼らの恩顧はたいてい1、2年しか続かず、そうなると生活は不安定で、「ホサナ」と熱叫してくれた教区民たちから、あくる日には「吊るし上げろ」と責められる始末。使用人と同じで、新しい主人を捜さないといけなくなる。たとえ認められたとしても、報酬など微々たるもの。

君に残されるのは、白髪の老年になっても、  
辺鄙な場所で子供たちに初歩文法を教える道。

驢馬のように、食べるのが精一杯の暮らして疲弊し、鞭は折れ、カプレット曰く、不幸の象徴である擦り切れ破れたガウンを羽織り、日々の仕事に苦しみ、わずかな給料で生きながらえて老い朽ちる、それだけの生活。文法教師は幸せならず云々。あるいは、パークレイのエウプロミウスのように、紳士の家の住み込み司祭になって、七年間つとめたら、聖職禄の半分をもらえるかもしれないし、ついには小さな牧師館を与えられ、そこには女中の母親か、貧しい親戚の女性、あるいは傷物の女中が住み込み、自分の生きている間、世話をしてくれるかもしれない。しかし、その間に、良くしてくれた主人を怒らせたり、奥方の不興を買ったりすると、

ヘラクレスに打ちのめされた怪物カークスのごとく  
足首をつかまれ引き出され、外に放り出されるだろう、  
大口をたたいたりすると——

もしその力を他のことに向け、たとえば貴人や大使の秘書になろうと思えば、そういった世界では徒弟のように次々と昇進するし、また職人の店の多くでは、主人が死ぬと、たいていはその店の職人頭がその後を継ぐことがわかる。対して、詩人、修辞家、歴史家、哲学者、数学者、ソフィストなどの場合は、まるでキリギリス、夏には鳴いて、冬には苦しむのが必至。というのも、こういった職種には昇進がないからである。いや、もしソクラテスのした愉快な話を信じるのであれば、彼らは文字通りキリギリスだったのだ。イーリッソス川のほとり、プラタナスの木の下で、ソクラテスが麗しのパエドロスに語った話、時は正午頃、暑い中、キリギリスが鳴いた。ソクラテスはこの絶好の機会を逃さず、詩神の生まれる前、キリギリスが学者や音楽家や詩人であったという話をしている。学者や音楽家や詩人たちは飲食することなしに暮らしていたので、そのためにユピテルがキリギリスに変えたというのだ。そして、彼らが今受けている扱いを見ていると、またしても、「ティトノスのキリギリス、リキュアのカエル」に変えられてしまうかもしれない。そうでないとしたら、私はただ願うばかりである、インド極楽鳥と呼ばれ、旅の蓄えなしに、空気と天の露だけで生きるフウチョウの如く、彼らが生きていけるように、と。目下のところ、彼らの「修辞はその悪運を呪うことにしか役立たず」、多くの人が、生活手段がなくて、苦境に追いやられている。キリギリスどころか、今や彼らはマルハナバチやスズメバチ、あるいは単なる寄生虫に成り果て、食事にありつき飢えた腹を満たすため、詩神をラバに貶める始末。実のところ、これこそ学者が辿るもっともありふれた運命で、貧乏で卑屈となり、哀れに嘆き、カルダーノやホルツマンなど多くの学者がしたように、尊敬もしていないパトロンたちにその窮状を訴えねばならない。献呈書簡などはまさにこの最たる例で、支援を得るため、嘘をつき、ごまをすり、大袈裟な讃辞と称讃で、無学で尊敬に値しない馬鹿を、すぐれた徳の持ち主と持ち上げ、褒め称える。そういったパトロンは本来、マキャベツリが言うように、その悪名高き悪行と悪徳のため、徹底的に貶しめ、罵るべき対象なのだが。つまり、学者はほんの少しの報酬を得るために、偉い人の太鼓持ちをし、詐欺師や金銭ずくの商人にまで身を落とす。彼らはインド人と同じで、膨大な黄金を持っているにも拘らず、その価値を知らないのである。というのも、私はシネシオスと同意見で、「シモニデスとの知遇によってヒエロン1世が得たものは、国王との知遇によってシモニデスが得たものよりも大きい」と考えるからである。偉人たちはすぐれた教育と素晴らしい教養、そして比類なき資質を手にするのだが、それは我々が授けるもの。もし大成すれば不滅の名誉を手にするが、それも我々の賜。片や我々は、いわば生ける墓標、記録であり、彼らの名声を一丸となって吹聴する。アキレスの武勲が伝わるのはホメロスのおかげ。アレクサンドロス大王の偉業を知ることができるのはアリアヌスやクルティウス・ルフスのおかげ。スエトニウスとディオ・カッシウスがいなかったら、ローマ皇帝について我々が知ることはなかったであろう。

アガメムノン以前にも、強き者は  
多くいたのだが、彼らは皆、嘆かれることなく、

人知れず永遠の夜の帳に隠されている。というのも、  
彼らには聖なる詩人ホメロスがいないから。

偉人が学者に被る恩恵は、学者が偉人に被る恩恵よりも大きい。にも拘らず、学者は自分を卑下し、偉人からは低く見られている。学者はたとえ百科全書の知識、すなわち世界中のすべての知識を身につけたとしても、それを世に知らしめることなく、「尊敬されることなく生き、飢えた生活を送らねばならない。彼らがへりくだろうとしない限り」。というのも、ビュデ曰く、「すぐれた学芸と美德の多くは、無学な支配者にとっては気に障ることはなほだしく、学者たちは、傲慢な支配者を崇拜称讃し、鼠のように人のパンのおこぼれで糊口をしのぐ幫間同様の生活を強いられる」からだ。事実、偉大な天文学者グイード・ボナッティが予見するように、「こういった学問は利益のあがるものではなく、貧乏で、空腹につながる」。

ガレノス（医学）は富、ユスティニアヌス（法学）は名誉を与える。  
しかし、生まれと身なりがよくても、学者は徒歩を強いられる。

神話の教えるところによると、詩神たちの家督は貧困のみ。ユピテルの娘たちは、いずれも神々に嫁いだとされるが、詩神たちだけは結婚することなく、彼女たちの住む詩の泉には求婚者がよりつかない。思うにこれは、彼女たちが財産を相続しないからである。

カリオペはなぜ永きにわたり結婚しなかったのか。  
それは数え上げるほどの持参金が無かったから。

それ以来、詩神の信奉者たちは貧困で、打ち捨てられ、ひとり取り残されている。それゆえ学者はその服装でそれとわかるとペトロニウスは主張する。「あるとき、見るからにみすばらしい輩が、私のところにひょっこりやってきたが、その服装をみただけで、私にはその人が、金持ちたちにしばしば嫌われる学者であることがわかった。実際、その人に職業を尋ねると、詩人だとの返答。さらに、そんなぼろを着ている訳をきくと、この種の学識を得ても金持ちにはなれないのだと答えた」。

貿易に投機する者は巨額の利益をあげ、  
陸海で戦いを求める者は黄金にとりまかれ、  
卑しき追従者たちも派手なマントを羽織る。  
ただ学者のみは、霜枯れの襤褸をまとおう。

こういった詩や数学や哲学といった学問を修めても、儲からず、敬意を払われず、パトロンがほ



とんどいないということは、普通の学生なら大学でみな正しく察知し、大慌てで有益な三学問たる法学、医学、神学に向かい、これらを勉強する。一方で、歴史、哲学、語学といった学問には見向きもせず、あるいは、ほんの軽く勉強して、食事の席での愉快的話題を提供するのに使ったり、会話の香辛料とする程度。つまり、こういった学問はどうしても修めなければならないものではないのだ。算数なんてものはお金が数えられれば充分だし、自分の土地を測量することができれば一端の幾何学者と言えよう。人が昇進したり、失墜するのを予見し、人の誤った動きに気づき、自分に役立てることができれば、占星学者として完璧だ。偉い人の愛顧や寵愛の光を反射させ、自分に当てることがこそが、光学の粋。昇進を勝ち取るための道具を作ることさえできれば、すぐれた技師なのだ。こういった考え方はポーランドでは一般的で、クロメルがつい先ごろ記した歴史書の第1巻にも書いてある。ポーランドの大学は概してレベルが低く、注目すべき哲学者、数学者、古典学者などは見つからない。というのも、定まった報酬や俸給がないので、ただ潤沢な聖職祿だけをあてにして、みな神学へ向かうからである。ポーランドより近隣諸国でも、こういった傾向は見られ、リップスは嘆く。「まだ知識も不十分で、そういった学問を修めるだけの能力がついていないのに、子息を法学や神学に向かわせようとしている。明らかに、報酬への期待が全ての学芸に先んじ、気のふれたギリシア人やラテン人が書き残したのものよりも、黄金の山が重宝される。こういった輩の中から、国府に入る人があらわれ、国王の助言者となる人もいて、頭角をあらわす」。そして「ああ、我が父、我が祖国よ」という嘆きは多くの人に共有される。というのも、我が国でさえこの傾向はあり、偉い人に仕えたり、司教宅に職を見つけたり（その結果、ちょっとした町に配属される）、聖職祿を得ることは、将来の希望があり、昇進につながるので、我々が狙う的となっている。

しかし、私の知る限り、こういった人々も他の学問を志す者と同様に上手く行かず、希望が挫けることも多い。たとえば法学の学位をとり、優秀で立派な法学者になれたとしても、開業したり、勤めたりする場所はない。この分野の需要はあまりに少ないし、市民法に禁止令が多すぎる。訴訟事件もほとんどない。地方の法律はやたらたくさんあって、覚えることがありすぎるので、法学は「何よりも無学な学」とエラスムスは言う（つまり、彼らは法学に関してはどれだけ学んでも学びきれず、それだけでは学者の名に値しないのだ）。法廷の職はほとんどなく、残っていたとしても、わずかな仕事で競争率が高く、どんなに優れた人でも出世することはない。医学の場合はどうだろう。どの村にも必ず偽医者、藪医者、インチキ医者が山ほどいて、パラケルスス主義を標榜する者、クライナルツが「医者を偽る健全者殺し」と呼ぶ輩、魔法使い、錬金術師、食い逸れた教会区牧師、もぐりの薬屋、医師助手、瀉血屋、乳母がたくさんいて、その腕を吹聴している。というわけで、医者になれたとしても患者は皆無で、とても食べていけない。その上、法学者と医者の数はあふれるほど多く、その中には強欲で貪欲、喧しくてずうずうしい人もいる。ファンデルドース曰く、訴訟好きの馬鹿垂れで、

べらべらと弁が立って傲慢だが、  
技術は皆無か微々たるもの、  
教養もほんのわずかしがなく、  
人の財布を搾り取る輩。  
おしゃべり好きの集団。弁論術だけは心得て、  
悪意にみちた諍い好きの集まり、ガウンを纏った禿鷲、  
盗人の女神  
ラウエルナの養い子、乞食坊主云々、

それゆえ彼らは生きる術を知らず、プラウトゥスがあの時計の喜劇、『ボイオティアの女』で馬鹿にするように、数は多いが、「その大部分は空腹で餓え、地べたに這いつくばり」、共喰いも辞さないほどで、結局は「悪しき技に身を染める」。インチキ弁護士やインチキ医師、いかさま連中があふれているので、正直者はこの世界でどのように身を処すべきかわからず、下劣な輩にまみれて立派に振る舞うことができない。「そして、高い学費を払い、徹夜で勉強して勝ちえた学問の名に値しないと自分を恥じる。今や……」。

最後に神学はどうであろう。もっとも高貴な職業で、二重の名誉に値すると言われるが、あらゆる職業の中でもっとも貧乏で悲惨である。信じたくない人もいるかもしれないが、以下の一節に少し耳を傾けてほしい。そんなに昔の話ではない。今やこの国の司教となった人物、当時は厳粛な牧師であった人が聖ポール大寺院で行った説教の一部である。「学識のうちに育てられ、両親によってこの職に就くよう定められた我々は、幼少時代をグラマースクール、すなわちアウグスティヌスが『強大な憎主、偉大な悪』と呼び、殉教の苦しみにも比す場所、で過ごすことになります。そして大学に入り、パラリスによって『飢えと恐怖以外何もない』状態に陥れられたレオンティノイ人のようにになると、両親の仕送りにたよってやってくるのですが、一つの学問を成就するまでに、無駄な出費、書籍代や学位代もかさみ、500ポンド、すなわち1000マルクを費やすことになります。これだけの時間をかけ、心身をすり減らし、資産と家督財産を食い潰してなお、法と相続権によって我々のものとされるささやかな報酬、すなわち貧しき牧師館と年取50ポンドの牧師祿を得られない場合は、聖職任命権者に生きている間（といっても既に擦り切れた寿命ですが）、年金か、謄本保有権の利子を越えて支払いを続けなければなりません。これは我々の魂を危険にさらす行為、いや魂を喪失する行為と言ってもよく、というのは聖職売買や偽証罪に関与するわけで、本質的にも可能性としても、現在、そして未来における我々の霊的上昇を喪失する行為になるからです。このように大きな借金につながり、乞食になることがわかっていながら、自分の息子をこの道に進ませるような愚かな父親がいるのでしょうか。このような人生をわが子に歩ませるような不敬なキリスト教徒がいるのでしょうか。この道は、ほぼ確実に、悪につながり、息子は罪に向かい、聖職売買と偽証罪に関わることになります。そのとき、『招かれても、断って橋の上から動かない』ユウェナリスの乞食のように、たとえ飢えていても、罪

に気づけば、断れるでしょうが」。こんなことであれば、聖職者の卵である我々のほうが、釣果は大きかったのではないか。もちろん、そんなに大した成果は得てないのだが。「こんなことのためにやせ衰えなければならぬのか、食事を抜かねばならぬのか、こんなことのために」。こんなことのために、我々は一年中、早起きしなければいけないのか。件の牧師曰く「鐘の音を聞くと、あたかも雷鳴を耳にしたかのごとく、慌ててベッドから飛び起きてまで」。我々が得ることのできる尊敬と報酬と名誉とがこれっぽちなのだとしたら、「詩神タリアよ、つまらぬ筆を捨て、書を引き裂け」。書物なんて捨ててしまい、他の道を模索しよう。なんのために我々は勉強しなければならないのだ。「両親はなぜ、愚かにも私を学問の道へ向かわせたのか」。その挙句、二十年の研鑽の後、新参者のように職を探す羽目になるとは。なぜこんな苦痛を耐えなければならぬのか。「なぜこんなにもたくさんの下らぬ本を読んでやせ衰えねばならぬのだ」。もしこれ以上の報酬や見込がないのだとしたら、繰り返し言おう。「詩神タリアよ、つまらぬ筆を捨て、書を引き裂け」。兵士となって、本を売って剣と銃と槍を買おう。あるいは本は瓶の栓にしたらいい。もしくはクレアンテスがかつてしたように、哲学者のガウンを、粉屋の服に変えてしまおう。全てを投げ出し、新しい道を歩もう、こんな悲惨な生活を続けるよりは。「学問によって偉い人の最良を無理に求めるよりも、爪楊枝をつくる方が尊い仕事だ」。

私が学者の状態、特に神学者のそれについて語ってきた事柄、すなわち、今の時代、彼らが惨めな貧困に喘いでいるということ、教会がその船荷を難破で失いつつあること、彼らが嘆くのは正当だということについては、真実なのであるけれども、これらに対し異議申し立てをする人がいることもわかっている。どこかに誤りがあるのだ。しかし、その誤りはどこから生じているのか。その原因を正しく追及すれば、それは我々自身に跳ね返ってくるだろう。我々がもし真実の法廷に召喚されれば、有罪判決を下されるだろうし、正直、我々に誤りがあることを言い逃れることはできないだろう。そもそも買い手がいないのだとしたら、売り手は存在しないのだから。しかし、この事態について深く考えて見るならば、こういった悲惨な状態が、弱みに付け込む聖職任命権者から生じているのは火を見るよりも明らかだろう。ただ、彼らを糾弾するとしても、我々自身が許されるわけではない。彼らも我々もともに間違っているのだ。それでも、私自身の下す判決によると、彼らの誤りの方が大きく、その原因はあきらかであり、激しく非難されるべきである。私自身の場合、原因は私にはないと望んでいるし、そうあってしかるべきなのだが、もしその通り私に原因がないなら、似たような境遇のカルダーノが述べた言葉を引きつつ、原因は「彼らの悪意よりも私自身の不運にある」と言いたい。ただ私の場合、たしかに就職の邪魔をしてきた人はいたし、文句を言うだけの資格はあるのだが、自分自身の怠慢があったことも否定できない。というわけで、私の場合にはプルタルコスのクラスス伝に出てくる哲学教師のアレクサンドロスの境遇に似ている。このアレクサンドロスは長年にわたって富豪クラススの知遇を得て生活したのだが、多くの人が不思議がっているように、クラススのところに初めて来たときからずっと変わらぬまま貧乏であったという。アレクサンドロスは決して求めなかったので、

クラススも決して与えなかったのだ。また二人で一緒に旅行したとき、アレクサンドロスはクラススに帽子を借りたのだが、旅から戻ると、その帽子を持主に返したということだ。私にも何人か高貴な友人や学者の知り合いがいたが、たいていの場合（普通の礼儀作法や挨拶は別として）、その人たちと出会っても、出会ったときと変わらぬまま別れを告げた。彼らが私にくれたのは、私が要求したものだけであって、それはつまり——アレクサンドロ・ダレクサンドロ（『生誕日』6.16）がジェロニモ・マッサーニオに答えているのと同様。「数多くの怠惰で無能な輩が、名誉ある職や聖職についているのを日々目の当たりにし」、他の人たちが昇進していく中、「人生と運命において、仕事と研究の報酬を与えられるべき」アレクサンドロが同じ立場にとどまっているのをマッサーニオは不思議に思った。アレクサンドロの回答は、自分は今の状態に満足していて、野心はない、というものだった。ただ「低い身分の者が聖職や司祭職についているのを知ると、自分の怠惰を激しく諫めていた」という。私も、ひょっとするとアレクサンドロの本を持つだけの価値もないかもしれないが、それでも、少し勘違いしたというか、私のことをよく思ってくれる友人がいて、同じようなことを言われることがある。それに対し私はアレクサンドロ同様、自分は十分に、いやもしかすると自分には勿体ないくらいにいただいている、といつも答えている。そして皇帝から名誉と職を与えられても、「役人であるよりは智者」であることを選んだソフィストのリバニオス同様、私はつねにデモクリトス・ジュニアとして生きていきたい、博士や司教の称号を与えられるよりも一介の市民でありたいと思っている。——しかし、それも何ゆえに。そうでなくとも、生計の手段を売買し、教会から、神と人の法が教会に与えたものを私有的するのは、どちらの側においても唾棄すべき行為である。しかし、たいていの場合、この行為に関わる人たちの貪欲と無知から、それが生じている。私はまずもって、この種の過ちの根源として貪欲の名を挙げたい。貪欲は旧約のアカンのように、人々を冒瀆行為に走らせ、聖職売買契約や何だの自分たちのことしか考えない行為に向かわせるので、神の怒りを買ひ、自分たちのみならず他の人々にも、疫病や復讐、そして恐ろしき天罰をもたらすことになる。汚らわしい金儲けへの飽くなき欲望のため、金持ちになろうと金を手に入れるのに正不正を問わず、とにもかくにも手に入れる人がいる。また放蕩と浪費によって財産を使い込んでしまい、その分を取り戻そうと、教会を餌食にして強奪し、背教者ユリアヌスがやったように、聖職者たちから財産を略奪する人もいる。しかも、我々の偉人コークが看破するように、その略奪は「半分だけ行われ、聖職者たちが生きていけるだけの分は残しておく」。このため、蛮行が増え、神学者は大いに腐敗する。というのも、多大なる努力をしても、食べていくことができないのだとしたら、誰が神学をしたい、もしくは子息や友人にそれをするよう勧めるだろうか。こんなことをしてその結果どうなるか。

君は全力で富を求めるが、  
その挙句、収穫は惨めさだけ。



こつこつ骨折って働いた末の収穫無し。聖職売買に手を出す家は、たいていは不幸に陥り、末代まで呪われる。また誰もががしていることを見れば、そのやり取りの一つ一つにおいて、彼ら自身も呪われているのだ。「この世でキリストからその財産たる聖職をだまし取る者が、どんな顔をして、天国でキリストからその財産たる祝福を期待できようか」とアウグスティヌスを引用しつつ言う人もいる。私は、聖職売買を行う聖職任命権者たち、また十分の一税を着服するような人たちにはみな、ヘンリ・スペルマン卿やジェイムズ・センピル卿のすぐれた論攷、また最近この問題について論じたティルズリ博士やモンタギュー博士の精緻で学識ある論文を読んでもらいたいと思っている。しかしたとえ読んだとしても、彼らには役に立たないだろう。「海と空とをかき乱すほどの大声で叫んでも無駄だ」。怒鳴りつけ、論し、地獄と墮獄について説教し、それが罪であると告げたところで、彼らは信じようとはしない。弾劾し、脅しつけても、彼らは良心を焼灼してしまっていて、耳を傾けない。まじないを受け付けぬ毒蛇のごとく、耳を閉ざすのである。事実そういう人もいたので、彼らのことを卑劣漢、不信心者、冒涇者、野蛮な輩、異教徒、無神論者、快樂主義者と呼んでみるのだが、彼らときたら、プラウトゥスの女衛よろしく「そうかい、そいつは素晴らしい」と声を上げるだけ、あの守銭奴よろしく「金庫の金を見るとすぐに」自画自讃する。何を言っても、「どうやって手に入れたとしても金は金」と開き直る。月に向かって吠える犬のように、何を言っても無駄なのである。私たちは天国を選ぶのだから、彼らには金を選ばせておけばよい。彼らは卑しくて、冒瀆的、快樂主義で偽善的な輩なのだから。私としては、彼らが熱意あるふりをしたり、宗教的態度を装ったり、世間の目を欺いたり、大言壮語したり、教会の財産を着服して肥え太って偉ぶったり、孔雀のように絢爛豪華な生活をしていても構わない。この件に関して私の慈悲心は冷たく欠けているので、私は彼らのことを芯から腐っていて、骨には快樂主義の偽善がつまり、骨の髄は無神論者で、異教徒よりもひどいと思えない。「そもそも第一に」とハリカルナツソスのディオニュシオスが『ローマ史』7巻で論じるように、「ギリシア人も夷狄人も宗教的儀式はすべて遵守し、神々を怒らせることを畏れて、決してその儀式を破ろうとしない」。これに対し、今現在聖職売買を行う人たち、愚かなアカンたち、良心の麻痺した聖職任命権者たちは、神も悪魔も畏れず、これは罪ではないとか、神の掟に照らして守らなければならないものではないとか、よしんば罪だとしても、大した罪ではないなどと言い逃れる。彼らがこのために日々罰せられ、また「霜と詐欺は悪い結果を招く」というカムデンの格言をはっきり認識しているとしても、クリュソストモスが言うように「罰から善いものは生じない。人の悪は反対されることによって刺激を受けるが、それと同じように罰せられる者は日々増えている」。罰はかえって逆効果なのだ。「犯罪だと言うことで彼らの怒りと気持ちに火をつける」のであり、矯正されればされるほど、彼らは腹を立てるのだ。だから好きにさせておけばいい。「強欲な山羊よ、葡萄の木を齧れ」。いつまでも反省せず悪行を続け、罪ではないと憂いなく楽しませておけばいいのだ。最後には神の怒りが降りかかり、彼らが不当に入手した品々は、鷲の羽のごとく、彼らの残りの財産をすべて焼き尽くすだろう。聖域から略奪されるツールズの金は決してよい結果をもたらさないのである。クリュソストモス曰く「その金を金庫の中に入れ、泥



棒が近づかないようにして、扉をしめて鍵をかけておけばいい。しかしその中には詐欺と貪欲という二人の破壊的な泥棒がつねにいて、悪が手に入れたわずかなものが、残りの品をすべて駄目にしてしまうのだ」。イソップ寓話の鷲は、一切れの肉が生贄に捧げられようとしているのを見て、爪で搔っ攫い、その肉を巢まで持ち帰った。しかし、その肉にはたまたま燃え盛る石炭が刺さっていて、気づかぬうちに、子鷲たちもろとも巢を全部焼き尽くしたという。教会を破壊する聖職売買を行う聖職任命権者たち、教会泥棒のハルピュイアたちには、これと同等の運命が訪れるがいい。

二つ目の原因は無知、そしてそこから生じる軽蔑である。「大衆の無知ゆえに学問に対する嫌悪が生じた」とユニウスは看破している。学識に対する嫌悪と軽蔑は無知から生じる。大衆は自分たちが野蛮で馬鹿、頭が鈍くて文盲、それでいて傲慢なので、他の人もそうだと考える。

フラックスよ、マイケナスを生じせしめよ。さすればウェルギリウスに事欠かぬ。

気前のいい庇護者がいれば、あらゆる学問分野で労を惜しまぬ学者があらわれるものである。しかし人々が学識を軽視して、読み書きができ、証拠をかき集め、「装うことも知らず、それゆえ生きることも知らなかった」かの皇帝程度のラテン語ができれば充分資格があるなどと考えると、国政に参画したり、公共の福祉に利する行為をしたり、そういった職につくには不適切で、戦役につくか、そこらの郷士がやっているような地方判事くらいのことしかできない。そして子供を育てても、たいていの場合、自分たち同様、野卑で、学なく、教養なく、礼節なき子供しか育たない。「我々の子供の中に、学問を正しく学ぶ者がいるか。弁論術、もしくは哲学に触れる者があるか。我々が行いの精髓ともいえる歴史書を読む者がいるか。親たちは自分たちの願いをかなえるために急ぎすぎている云々」。これはリプシウスが自分の国の無教養を嘆いた言葉であるが、現代の我々にも通じる。このように取るに足らぬ人々、学生が何をすべきかを知らぬ人々、真の学者と鈍ら者の区別さえつかないような輩に、学者の価値を判断させていいのだろうか。弁舌さわやかで声が大きく朗々とした調子で話し、つまらぬ引用句集の力を借りて、他人の収穫物からいくつかメモをとって盗み、それらしくしているだけの鈍ら者と、真に学識豊かな人との区別さえ彼らはつかないのだ。この手の鈍ら者は説教するというより、ただ話すだけ、あるいはかつてある厳粛な人が表現したように「空の荷台で逃げ去る」ことしかせず、我々と我々の苦労を貶し、我々とすべての学識を軽蔑している。彼らは裕福で他にも生きていく手段をもっているので、知識をつけたり、そのために煩わされたりすることはないと考えている。ペンとインク壺にまみれ、教育の奴隷になるのは次男坊たちか、貧乏人の息子たち向けの仕事であり、紳士には全く適さない職業だと思っているので、フランス人やドイツ人がよくするように、彼らは自分たちには関係ないと、すべての学識を無視する。天文学は航海士が、算術の勉強は問屋商がすればいい。観測士は幾何学を、眼鏡職人は光学をすればいい。放浪者なら地理学、町役人なら修辞学が

役立つかもしれないが、掘る土地もないのに鋤は不要だ。つまり使いもしないのだから、自分たちには学識など不要という論理。こう考えるので、彼らは航海士や徒弟や奴婢たちが自分たちよりもすぐれた知識をもっていて恥じることさえないのである。かつては国王、君主、皇帝だけが学者であり、彼らはすべてにおいて優れていたというのに。たとえばユリウス・カエサルは曆を改定し、自分で記録をつけていたという。

——つねに戦いのさなかにありながら、  
星と天と空とを見る時間を割いていたのだ。

アントニウス、ハドリアヌス、ネロ、セウェルス、ユリアヌス等のローマ皇帝、さらにビザンティン皇帝のミハエル、コムネノス王朝のイサク皇帝は、かなり学問に没頭していたが、それは身分の低い人間にはとても真似できないほどの量であった。オリオン、ペルセウス、アルフォンソ10世、プトレマイオスは天文学者としても有名。ペルシア王サボル、ポントス王ミトリダテス、マケドニアの將軍リュシマコスリュシマコスは医者としても尊敬された。プラトンの論じる王はすべてそうだし、アラビア王エウアークスは、鉱物学の優れた専門家であり、類まれな哲学者でもあった。またエジプトの国王たちは、かつては学識ゆえに選ばれた司祭でもあった——人々の王にしてアポロンの司祭。しかし、このような英雄時代は過ぎ去ってしまった。この成り下がった時代、詩神たちは今やみすばらしいあばら家に追いついてられ、つまらぬ人々の相手をし、その活躍の場は、ほぼ大学に限られている。かつて学者たちは、非常に愛され、名誉を受け、尊敬されていた。ローマ詩の父エンニウスはスキピオ・アフリカヌス、ウェルギリウスはアウグストゥス、ホラティウスは皇帝の腹心マイケナスから愛されていた。彼らにとって詩人たちは、僭主ポリュクラテスにとってのアナクレオンのごとき、大切な存在であったのだ。ディオニュシオス1世にとってのピロクセノスも同様で、詩人は多大な報酬を受けた。アレクサンドロス大王は哲学者のクセノクラテスに、彼が金に困っていると聞いて、50タラント送ったという。ピロストラトゥスが皇帝ハドリアヌス、ランプリディウスが皇帝アレクサンデル・セウェルスについて語っているように「かつては、予見力や学識で著名な人々は国王の食卓についていた」。有名な学者たちは大学だけでなく、こういった君主の宮廷にも招かれ、まるで神々の宴に出席するかのごとく、王族と食卓をともにすることも許された。マケドニア王アルケラオスは詩人の甘美な言葉に喜び、エウリピデスが同席しなければ食事することを望まなかった（ある晩、エウリピデスのいない席で、王は詩人に向けて乾杯し、後日、その労をねぎらって金杯を与えた）というが、さもありませんといった話である。というのも『プロタゴラス』でプラトンが言うように、偉大な哲学者は、偉大な王がその国の庶民から抜きこんでいるのと同じくらい、他の人たちよりも抜きこんでいるからである。また「彼らには何も欠けておらず、また貧困に陥ることもまったくないので、彼らが公然と行う学問を世間の軽蔑から守ることができるのは彼らだけである」。彼らには身を低くして物乞いをする必要などなかったのだ。これに対し、現代では学者は虐げられ、貧困を嘆き、一食を得

るために金持ちの無骨者に拝跪するありさま、とても自分と自分の奉じる学問を守ることなどできない。いや、守りたいとは思っているのだが、できないのだ。というのも、学者を勉強させるためには貧乏にさせておけばいい、と公式のように信じている人がいるからだ。学者の食事は、競馬の馬のようではなければならない、太らせてはいけぬ。「学者には食事を与えるべきだが、太らせてはいけぬ。すぐれた頭脳の炎が消えてしまわぬように」。太った鳥は歌うことができない。太った犬は狩猟には使えない。そしてこの抑圧によって、学者には生活手段を絶たれる者、意思を失う者が現れ、誰しものが支援なく、ほとんど棄て去られた状態で、人々からは蔑まれる。「フラックスよ、マイケナスを生じせしめよ。さすればウエルギリウスに事欠かぬ」とは古い格言だが、この格言は今なお正しい。しかしながら、しばしば、我々自身に主たる過ちがある場合も否定できない。エラスムスの批判は正しく、今の学者は、庇護者の申し出を無視したり、間違っただけの人を選んだりしてしまうことが多すぎる。「我々は提示されたものを無視し、あまり適切でない申し出を選んでしまう」。また、たとえ良い申し出を得たとしても、「我々はその与えられた仕事において、庇護者の寵愛に従おうとしない」。エラスムスは「同じことが、若いころ自分にもあった」と言い、「自分も大きな過ちを犯した」と認めている。私自身もこの点で過ちを犯したと言えるし、おそらく他にも多くの方が同じ過ちを犯しているだろう。我々は「自分たちを選んで庇護してくれる者の寵愛に応えず」、怠惰でいたい、自由を束縛されたくないと、自分たちのやりたいようにする。「自由を過度に愛しすぎたばかり、長い間、偽りの友人、果てしない貧困と戦うはめとなった」とエラスムスは述懐する。内気と憂鬱と臆病のため、我々の多くはあまりに引込み思案で無気力になりすぎてしまう。このように引込み思案で失敗する人もいれば、逆の方向で失敗する人も多くいて、我々はでしゃばりすぎたり、欲張りすぎたり、野心丸出しであったり、厚かましすぎたりすることがしばしばある。我々はよくマイケナスがいないとか、支援が少ないとか、生活できないとか嘆いているが、その実、本当に欠けているのは、我々自身の価値であり、その能力である。そもそもマイケナスがホラティウスやウエルギリウスに目をかけたのは、彼らがすでに頭角を現していたからではなかったか。へぼ詩人パウイウスやメウイウスには庇護者などいなかったではないか。「すぐれているという証拠を出してもらおう」とエラスムスは言う。でしゃばって、厚かましくも偉い人のところにやってきて、自分たちを売り出すのなら、まずは自分たちに価値があること、そして十分な学識があり、洗練された礼儀作法を身につけていることを示さねばならないわけだが、これができる人はきわめて少ない。多くの人は、偉い人に取り入るために、おべっかを言うのだからいやらしく、お金をもらおうと計略を練るのだからあからさまだし、褒め言葉も大げさでわざとらしく、恥ずかしくて聞いていられないし、見ていられない。「過度に褒めても、褒められず、むしろ嫌われるだけ」、虚しい称讃をすれば真理から遠ざかるのみ、結果として「褒められる人にもよくなく、褒める人にも悪い」。かくして我々は過ちを犯すのだが、主たる過ちは庇護者がいないという厳しい現実である。かつてプラトンはディオニュシオス1世にどれほど愛され、どれほど尊敬されていたことか。どれほど愛されていたことか、アリストテレスはアレクサンドロス大王に、デメラトスはフィリッポス2世に、ソロン

はりディア王クロイソスに、アナクサルコスとトレバティウスは皇帝アウグストゥスに、カッシウスは皇帝ウェスパシアヌスに、プルタルコスは皇帝トラヤヌスに、セネカは皇帝ネロに、シモニデスはヒエロン1世に。彼らはどれほどの名誉を受けていたか。

しかし、これは昔のことだ。今や彼らは人知れぬ  
静寂のなかで、年老いていく。

そんな時代は過ぎ去ってしまった。

学問への希望と期待が向かうのはカエサルのみ。

とかつてユウェナリウスは言ったが、これは現代でも正しく、国王は我々のお守りであり、太陽であり、唯一の慰めであり逃げ場である。我々のプロトマイオスであり、我々が共有するマイケナスである。ジェイムズ寛大王、ジェイムズ平和王、詩神たちの司祭、哲人王、「我々の偉大なる栄光、偉大なる支柱」。国王自身が著名な学者であり、学識に対する唯一の庇護者であり、学識を支える柱である。学問における国王の素晴らしさはあまねく知られていて、カトーについてパテルクルスが言ったごとく、「それを褒め称えるのはかえって不敬にあたるほど」。また小プリニウスがトラヤヌスについて述べた如く「このように短くて恥ずべき奏上ではなく、荘厳な詩と歴史書における永遠の名誉が貴方を褒め称えるでしょう」。しかし、今や国王は崩御され、我々の太陽は沈んでしまった。

——陽は沈んだが、その後に夜が来たわけではない。

というのもまた別の太陽が現れたからである。

——黄金の枝を引き抜くとそこから、  
同じ金属でできた枝が生えてくる。

新国王の治世が、長く栄えんことを。

私の守護霊に対しては憎まれ口を叩くわけにはいかないし、嘘をつくわけにもいかない。否定するわけにはいきまい、この国にも少しばかりだが、あちこちに優れて学識のある紳士方がいるのだ。まるでドイツのフガー家の人々、フランスのデュバルタス、モルネ、アントワヌ・ドゥ・ラシャンデュ、イタリアのピコ・デッラ・ミランドーラ、ショット、パロティウスのように優れた方が。

## 深き海を泳ぐもの少なし。

しかし、その数は全体にするとわずかで、大半は（もちろん、そうでない人もいるのだが）鷹狩や狩猟に夢中で、女性や狩りや酒に溺れることで身を崩してしまうことも多い。彼らが狩りや酒や賭博や女遊びの合間に時間があって本を読むとしても、それはイギリス年代記やユオン・ド・ボルドーもの、『ゴールのアマデイス』などのロマンス、演劇本や最近の出来事を報じるパンフレットにすぎず、しかもそんな読書も外出することができずに暇を持て余すときだけで、彼らの話題は犬や鷹や馬、それから最近の出来事だけである。彼らがイタリアを旅行したり、皇帝の宮廷にまで足を延ばしたり、オルレアンで冬を過ごしたりすると、片言のフランス語で女性に言い寄ってみたり、最新ファッションで身をやつしてみたり、類まれな歌声を披露してみたり、いろいろな紳士や淑女、町や都市や宮殿について話もし、そのさまは完璧で、称讃される。しかし、こういったこと以外では、みなどんぐりの背比べで、称号がなければ主人と召使いの区別もつかないほど。実際、一度目を閉じてから、服装は別として、腰かけている主人と、その後ろで皿を携えて侍す召使いとの違いを見つけてみてほしい。まったく、こういった人々が、我々の守護者となり、相続によって高貴で、偉大で、賢明であるとされ、しばしば政治家や治安判事など統治者になるのだから。

「名門貴族の方々よ」、繰り返しになるが、誤解しないでいただきたい。貴族院の方々、紳士の方々、私はあなた方の名前と人柄に対し、恭しく敬意を捧げ、あなた方のご批判を謙虚に受け止め、あなた方に身を低くして奉仕いたします。真摯に申し挙げて私の知る限りでも、あなた方の中には庇護者の名にふさわしい方、真の愛国者はたくさんいて、それ以外にも、私がお会いしたことも耳にしたこともない何百もの方がいて、我々の国の支柱となっている。その方々は、素晴らしくて気前良く、学識があつて熱心で信仰心篤く、あらゆる学者から尊敬されていて、末代まで称えられてしかるべきだと思う。しかし、あなた方の階級にはやはり、身を持ち崩し、墮落し、貪欲で、無学な輩もいて、彼らは単なる牛（神に誓って、私には彼らは自由人の名に値するとは思えない）や野蛮なトラキア人（この称号を否定しようなんてトラキア人はいない）と変わらぬ連中だ。卑劣で冒涇的で邪悪な集まりで、信仰なく厚かましく愚か、まったく何と呼べばいいだろう、学識の敵、教会の破壊者、国家の禍根とでも呼ぶべきか。彼らは相続権により聖職任命権者となり、教会の発展のために、その財産を自由に使うよう託されるのだが、指揮官としては厳しく、作業員から藁を奪い、それでいてたくさん煉瓦を作るよう命じるようなものだ。たいていは自分たちのことしか考えず、その行動の原動力は金で、結局のところ、一番多額な金を渡してくれる者を、優れた資質のある者として司祭にする。諺にあるように「金がなければ望みなく、司祭になれない」のだ。「黄金を差し出さずに望みをかなえようとするなら、彼らを大いに怒らせてしまうことになる」。まるでケルベロスに与える餌みたいなもの。地獄に向かう者は



ケルベロスにパン切れを渡して通るといだが、これと同じで、聖職につきたい者は、彼らの従者や使用人に袖の下を渡したり、食事をご馳走したりせねばならない。古い格言にあるように「ローマには金で買えないものはない」。これはカトリック時代の名残で、決して抜き去ることはできず、金がなければ何をするにしても無駄だし、希望もない。聖職希望者が自分を売り込んで、その価値、学識、正直さ、信心深さ、熱意を訴えれば、確かに彼らは褒めてはくれるだろう。しかし「美点は褒められるだけで、冷たくあしらわれる」。アプレイウスの物語で、プシュケを見ようと多くの人が集まったように、きわめて優れた人物がいるとすれば、彼らもその話を聞こうと集まってはくる。「たくさんの人間が世紀の美女、栄えある姿を目にせんと集まってきた。プシュケはみなから褒められ、眺められた。しかし、王であれ王子であれ誰であれ、彼女に結婚を申し込もうとやって来る人はいなかった。誰もが確かにその神々しい姿を褒め称えたが、まるでそれが巧みに描かれた絵姿であるかのような称讃の仕方だった」。誰も彼女と結婚しようとはしなかった。麗しのプシュケには「持参金がなかった」からだ。人々の態度は、学識についても同じ。

———ようやく貪欲な金持ちは、教養ある  
人々を尊敬し、称賛するには至ったが、  
その褒め方は子供が孔雀ユーノーの鳥に喜ぶのと同じ。

すぐれた人は、君が適任だ、君が就職できなのは残念だ、頑張りたまえなどと褒めてはもらえるかもしれないが、聖職任命権者はこの点では頑固だし徹底していて、任命するかしないかは彼次第なのだが、すぐれた人を任命することはない。その人がお金を持っていない限り。たとえ職を与えるとしても、大した職ではなく、姻戚関係や血縁関係の蓄えを無心させ、正式に任命するまで、ラケルに仕えたヤコブのように七年仕えさせる。初めて門戸を叩くときは、聖職売買の門をくぐらなければならず、食卓の上に金をおいて、すべての契約を履行できるだけの確かな証拠を示さなければ、相手にしてもらえないし、家に入れてもらえない。しかし、貧乏学者や三流の教区牧師がやってきたり、住み込み司祭が提示額の半分か三分の一しか受け取らなかったり、言い値で承諾すると歓迎され、さらに柔軟性があって、自分好みに説教してくれるようだと、誰にもまして最良してもらえる。というのも彼らにとっては最も安いものこそ、最もすぐれたものだからである。ヒエロニムスがクロマチウスに語ったごとく、まさに「皿に見合った蓋」というわけで、この聖職任命者にしてこの牧師あり。救済は充分にもたらされるわけで、どちらにとっても嬉しい話。クリュソストモスが自分の時代について嘆いた言葉は、我々の時代でも正しく、「裕福な人たちは、こういった人々を寄宿者として集め、食卓で犬同様の餌付けをする。彼らの飢えた胃袋に豪勢な食事の残りを与えて満たしてやり、自分たちの好きなように虐待するのだ」。「子供たちが鳥や蝶を糸につなぎ、好きなように外に出したり中に入れたりするように、彼らは住み込み司祭をつかって、自分たちのやりたいことを指示したり、命じたりし、出し入れも自分たちのお気に召すまま」。任命権者にピューリタンの傾向があれば、お抱え司祭もそうなるし、カト

リックの傾向があれば、寄宿する聖職者もそうなる。でなければ、締め出されるまでだ。任命権者たちが職と聖職碌とを与えるのは、このように彼らの役に立つ輩である。一方、大学人である我々は、牧場にいる骨と皮だけになった子牛のように、自分たちの番がくるのをぐずぐずと待ち、庭で摘み取られることなく枯れる花のように萎れ、決して登用されることはない。あるいはたぐさんの蠟燭と同じで、互いに自分たちだけを照らしているのだが、個々の光が目立たなくなるだけで、大学では冴えることもない。この中から暗い部屋、すなわち聖職碌を得て田舎へ行き、一本になって光り輝き、美しい光を放ち、みなから認めてもらえるようになるのを待つが、そうなる人はほとんどいない。我々は、ベテスダの池で天使が水を動かすまで待った病人たちと同じように、大学で任命の時が訪れるのを期待して待ち続けるのだが、任命権者たちが割って入り、我々から就職の機会を奪ってしまうのだ。それだけではない。長い間待ち続け、大金をつぎ込み、あちこち回って自分と友人たちを熱心に売り込み、ようやくわずかばかりの聖職碌を手にしたとしても、それは次の災厄の始まりにすぎず、肉体、世俗の世界、悪魔が新たに襲いかかり、我々は突如として、これらと向き合うことになる。我々は大学での静謐な生活を捨て、災厄の海に飛び込むわけだ。赴任地はぼろぼろの家で、以前は住むことができたのに、多大な出費を払って修繕しなければならぬ。するとこの出費のために裁判を起さなければならなくなり、さもないと、我々自身が、前任者の借金のために召喚され、訴えられ、泥沼化する。初年度の年収と十分の一税と国からの補助金、上納金と巡錫料はすぐに払わなければならない。最も恐れるべきは、ブラバントのクライナルツが教区司祭碌とベギン修道会の家賃のために陥った事態、つまり権利を剥奪されてしまうことである。クライナルツは任命されるやいなや訴えられ、彼曰く「我々はすぐに争い始め、容赦なき戦いへと突入していった」。トロイの包囲よろしく十年に及ぶ裁判を繰り広げ、疲弊し、金をつぎ込んだあげく、彼は静寂な生活をもとめて喜んでその地を去り、その権利を敵に受け渡したという。こうでもしないと、我々は威張りちらす役人たちに侮辱され、踏みつけられ、貪欲に料金を奪り取ろうとするハルピュイアたちに根こそぎ皮をはがれてしまう。我々は前任者の過誤を恐れながら暮らし、治安妨害をして手に負えない分派、気難しいピューリタン、意固地なカトリック教徒、無神論で淫らな快樂主義者（矯正不能な連中）、長い裁判によって強制されないかぎり、または文句を垂れながらでないと税金を払おうとしない訴訟好きな人々（戦うべきエフェソスの野獣）に囲まれて倒れる。「平信徒たちは徹底して聖職者を嫌う」とは古い格言。信徒たちは入手すべきだと考えるものはすべて教会から受け取り、しかも礼節をわきまえず、はげしく奪い取るので、貧しい牧師は人生を投げ出さないまでも、その赴任地にうんざりしてしまう。また、信徒たちがおとなしくて正直で、教会を大切にするような人たちの場合、これはしばしば起こることなのだが、赴任者は礼儀正しく洗練された学者から、田舎臭い粗忽者に転じ、一人で鬱々とし、学んだことも忘れてしまう。さもないと、多くの人が辿る運命だが、麦芽酒製造家や羊飼いや商人等になってしまう（今やローマからポントゥスに移されたオウィディウスのように、<sup>ムーサ</sup>詩神たちの交わる場所、学問の世界から追放され、田舎の村に閉じこもる）。そして日々、馬鹿と道化を相手に話をするようになる。

他方、我々に関しても同じことがあてはまる（というのも我々もこの過ちを免れているわけではないので）。彼らよりも深刻だとは言えないまでも、我々は同じ非難にさらされる。実に、我々の罪、我々の怠慢、我々の貪欲のために、何度も何度も、これほど破廉恥な取引が教会で行われる（「神殿も神も金で買えるのだ」）。これほどの背徳が持ち込まれ、これほどの不敬が、これほどの放縦が跋扈し、教会は災厄の流れる狂える海峡、渦巻く湾となっている。私は言いたい、これは我々全員の、特に大学人の過ちだ。国家がこれほどひどく被害を受けているのは、我々の学床に原因がある。さらに、上記の悪を惹き起こすのも我々だ。男らしくこの災厄に立ち向かうことはなく、我々はどんな非難を受けても、どんな惨状に陥っても自業自得である。我々に何が期待できるというのだろうか、日々、何の選別もなしに、これほど多くの貧乏学生、馬の骨とも知れぬ輩、あらゆる階級のくだらぬ連中が、学位を求めてこぞって入学してくる状況で。彼らは、もし一つ二つ定義と分類を暗記し、論理学もどきをともかくにも数年間履修しさえすれば——どれだけ進歩したかなどは関係なく、どんな人でも、馬鹿、ほら吹き、ぐうたら、賭博師、呑んだくれ、くず、欲望と快樂の虜、

ペネロペの不埒な求婚者たち、そしてアルキノスの……

なんでもござれ——こんな連中でも大学で数年間を費やし、自分が大学生であることを吹聴することさえできれば、金持ちという理由だけで、あるいは友人たちの助太刀によって、学位を与えられるのだ。さらに言わせてもらおうと、こんな彼らの品格と学識が大々的に称讃されることもあり、卒業の際には、彼らのお気に召すような素晴らしい出来の証書が与えられる。もちろん、それは、信用と評価をすぐに棄て去ってしまう人々によって書かれたものなのだが。デュジョン曰く「というのも博士や教授たちは一つのことしか頭にないからである。つまり、彼らは自分たちの仕事、特に正規のものよりも不定期な仕事を多くして、いかに儲けるか、そして公金を使っていかに昇進するかしか考えていないからである」。学寮長の念頭にも、毎年一つのことしかなく、数多くの卒業生を出し、いかに金をだましとるかばかり考えている。浅学であるか博学であるかには関心がない。その学生が毛並みがよく、洗練されていて、身なりがよく、まあ、一言でいうと、金持ちでありさえすれば。学問を解さぬ似非哲学者たちに修士号があたえられる。「彼らは学問には向いていないし、学位をとるために持ってきたのは希望だけだというのに、いきなり賢くなるよう命じられても無理というもの」。似非神学者は、金を払いさえすれば、充分以上の学を修めたことになり、優秀な成績で学位を着々と取得させてもらう。かくして、卑しき道化、学問の黄昏に佇む馬鹿、牧場の子鬼、徘徊者、放浪者、頓馬、間抜け、白痴、驢馬、動物としか言えない連中が、神学という聖域に汚い足で踏み込んでくるのだが、彼らが持ってくるのは面の皮の厚い顔とありふれた屑知識、それから巷でも聞いてもらえないような役立たずの断片的学問だけである。この取るに足らぬ連中、飢えていて、金欠、放浪者で食い意地のはった奴ら——むしろ彼

らは農耕をするべきで、祭壇よりも豚小屋に適しているのだが——こういった連中が、神聖なる学問を卑しくも穢してしまっただけだ。そしてこういった連中が説教壇に充ち溢れ、貴族の家に住み込みとして入り込んでいるのだ。彼らは身体と心が弱いので他の生活手段を奪われ、この国では他の役割を少しも果たすことができないので、この聖なる避難所に駆け込むだけなのだ。司祭権を勝ち取るのは、真摯な心がけがあるからではなく、是が非の思いであり、パウロが言うように「神の御言葉を商売道具にしている」。しかし、これを英国国教会にたくさんいる素晴らしい人たちへの軽視だとは考えないでほしい。彼らは極めて学識深く、傑出していて、雑じり気のない名声をもつ人々で、おそらく、その数はヨーロッパの近隣諸国のどの国よりも多い。また私は我が国の栄えある大学を軽視しているわけでもない。我が国の大学は、どの分野にも通じる博識な人材、あらゆる美德にすぐれて尊敬されるべき人材を数多く輩出している。そして、どちらの大学もより多くのすぐれた学生を輩出し、さらにその名を轟かせるだろう。先に述べた下劣な連中がその輝かしい光に影を落とさず、腐敗もはびこらず、儲けのことばかり考えるハルピユイアたちや卑しい連中たちが、我々のこの素晴らしさをやっかむことがなければ。というのも、この惨状が見えないほど、心の盲目な人はいないし、これを理解できないほど頭の鈍い人もいない。また馬鹿どもが徘徊して聖なる神学が穢されていること、そして神聖なる詩神たちが、あたかも世俗のものであるかのごとく、凌辱されていることを認めないほど判断が頑な人もいない。ルターがどこかで言っていたと思うが「この卑しく厚顔無恥な連中は、少しでも得するのであれば、牛乳桶にたかる蠅のように貴族や偉人の食卓に群がり、司祭職、あわよくば名誉職を与えられることを「期待する」。どの宮廷、どの都市にもそういった輩は溢れ、どんな仕事でもやろうと思っている。

——他人によって糸で操られる人形の如く——導かれるまま——

「わずかな餌を追い求め、それにありつこうとして、オウムのようにべらべらしゃべる」。このごますりの寄食者たちは、エラスムス曰く「何でも教え、話し、書き、論じ、自分たちの良心に反しても雇い主にはさからわない。これは、信者を健全に導くためというより、自分たちの財産を増やすための行動」。「彼らはどんな意見でも、それが神の言葉に反していようと、巻くし立てるのだが、それは庇護者を怒らせることを恐れるからで、未永き最良と大衆の喝采を保ち、自分の財産を貯めていくためである」。彼らの多くは心から神学に向かうが、それは神聖なることをなさんとしてではなく、私腹を肥やさんとするため。教会の善を促進するのではなく、それを略奪するため。パウロ曰く「イエス・キリストのものではなく、自分自身のもの」を求め、主の宝を探すのではなく、自分と自分の家族のための宝を貯め込む。この慣習は、財産が少なくて困窮した人々の間で行われているだけでない。こういった害悪は、中流・上流階級の人々、司教とは言わないまでも、この国の要人たちにも広まっている。



司教さま、教えてください。聖なるもので儲ける方法を。

「高き身分の人々を貪欲が墮落させることもしばしばあり」、日々の行いの正しさにおいて他をしるぐ人たちも同じく貪欲の餌食になる。そして聖職売買への道を照らす篝火を持って歩み始め、その腐敗の岩にぶつかる。彼らは獲物の毛を刈るだけで満足せず、皮をも剥ぐ。どこへ行っても、最後の一滴まで奪い取り、搾り取り、擦り取る。こうして彼らは魂とまではいかないにしても、その名声を深く傷つけ、難破してしまう。悪は下から上へではなく、上から下へ流れ出たようだ。「そもそも自分で買ったのだから、売ってもお咎めなし」という昔の戯言は本当になってしまったようだ。だからこそ私は教皇レオの言葉を借りて言いたい。「聖職を買いたいという人は権利をもらえなかった人だ。もらえなければ、聖職につけない。聖職につけなければ、聖職を売ることもできないはずである」。あろうことか、舵取りをする立場にある人たちの中には、人々に職を与えることをやめてしまう人たちがいる。自分たちが聖職に登りつめるのに学問がいかにか役に立ったかを、重々承知の上で、他人の就任を全力で邪魔するのである。「彼らが学問のおかげで登りつめたと信じるのは馬鹿だ。また彼らの地位は、才能と博識と経験と高潔さと敬虔さと詩神たちの報酬だと本気で考える人は心底狂っている」（かつては確かにこうだったのだが、今日では見込み違い）。この害悪がどのようにして、どこから生じたのかについては、これ以上詮索しない。ただ、これらを始点として、さまざまな悪徳のくずが生じ、あらゆる災難、災厄の連鎖が教会にもたらされる。ここから聖職売買が頻発し、ここから嘆きと騙しと詐欺が生じ、この泉からあらゆる罪悪が生まれるのだ。また野心や、宮廷でも見られないようなおべっか（これで家でのさましい食事が避けられる）や、贅沢や、時折見受けられる人生の酷い見本（これで人を怒らせることになる）や、快樂的な宴会などについては本題とずれるのでふれないことにする。ここから大学の荒廃、「現代における詩神たちの不遇」が始まる。学問のできぬ青二才が、その学問ゆえに成り上がり、地位を高め、金持ちとなる。偉そうな称号で傑出し、大いなる威光で輝き、衆目を釘付けにする。風格を装い、偉そうに歩いて、威厳と威光と驚くほどの気遣いを見せびらかす。髭は立派、外套はピカピカで深紅にたなびく。また家の調度品も素晴らしく、召使いの数の多いことでも群を抜く。ビュデ曰く「神殿の柱に刻まれた彫刻はまるで汗をかき、建物を支えているように見えるが、本当のところ、彫刻に感覚はなく、石が支える力に対して何の役にも立っていない」。この手の連中は石の彫刻と同じ、アトラスよろしく世界を支えているかのごとく見られたがるのだが、実のところ、日陰者のくず、とんまでのろま、石ころと何ら変わることはない。一方、学識ある人が聖職につくと、日の暑さに耐え、不当な運命のため、つまらぬ連中に仕えることとなる。有能で必要とされるべきなのに、もしかすると安賃金にも満足し、名前に称号がつくことなく、謙虚に、人知れず、褒められることなく各人こっそりと生き、小さな教会区に埋もれるか、大学という牢獄から出られずじまい、誰からも知られることなく、この世を去る。いや、これ以上、涙を乞うのはやめておこう。ここから涙なしには語れぬ状況、詩神たちの嘆きが生じるのだ。こうして宗教それ自体が、セセル曰く「笑われ、蔑まれる」。聖職は地に墮ち、もしそ



うなら、聖職者について卑しき人の卑しき言葉を借りて言いたい。聖職者は「卑しき烏合の衆」、無能で、粗野、卑劣で、憂鬱で、惨めで、見下げ果てた、唾棄すべき連中。

\* 太字表記は原文がラテン語もしくはギリシア語であることを示す。

テキスト

(底本) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Oxford English Text)* (6 Vols).

Ed. by T. C. Faulkner, N. Kiessling and R. L. Blair. Oxford: Clarendon Press, 1989-2000.

(参考) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Facsimile) (The English Experience)*.

Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy, What It Is, with All the Kinds, Causes, Symptomes, Prognostickes & Severall Cures of It*. Ed. with an Introduction by Holbrook Jackson. New York: Vintage Books, 1977.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation and embodied in an All-English text*. Ed. and trans. by R. Jordan-Smith and F. Dell. London: Routledge, 1931.

既訳

「第1部 第1章 第1節」	『京都府立大学学術報告 人文・社会』	第59号 2007所収
「第1部 第1章 第2、3節」	『京都府立大学学術報告 人文・社会』	第60号 2008所収
「第1部 第2章 第1節」	『京都府立大学学術報告 人文』	第61号 2009所収
「第1部 第2章 第2節」	『京都府立大学学術報告 人文』	第62号 2010所収
「第1部 第2章 第3節 第1 - 10節」	『京都府立大学学術報告 人文』	第63号 2011所収
「第1部 第2章 第3節 第11 - 14節」	『京都府立大学学術報告 人文』	第64号 2012所収

(2013年9月30日受理)

(おかむら まきこ 文学部共同研究員)

(かわしま のぶひろ 龍谷大学准教授)